

BLEACHとかいいながら
FAIRYTAILへ

Vent

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

突然謎の死を迎えたアルム・リバー、神はBLEACHの世界に転生するといつてアルムを落とすとその先はFAIRYTAILの世界だったという始まりをどうして展開される物語です

目次

森	間違えからの始まり
6	1

間違えからの始まり

「ここはー？」 そう呟く少年：アルムの周りは一面真っ白だった

「まあ、よくわからんが寝るか…」

「えっ!? ちよつと待ってよ!!」

「誰?」 アルムの目の前には訳のわからないことを言うじいさ んが一人いた

「誰って、わしや神じゃよ」

「紙?」

「いや、神ね」

「あ、髪ね」

「いやいや、神だつて『神〇万象チヨコ』の神!!」

「シビアなどこつくな…」

「……」

「……」

「で、君はなぜここに居るかわかるかい?」

「(無理やりはなし変えたな)」

「まあ、それは仕方ない(？▽？)」

「顔文字使っても意味ないだろ!!」

「まあ、いいじゃないか、それはそうと君は死んだことには気づいてる?」

「なんとなく」

「気づいてるなら質問くらいあるんじゃないの? (ゝωゝ#)」

「ない、それよりなんか話すことがあるから来たんじゃないの?」

「そんなことよ:」はやくはなせよ」

「:わかつた...君はまだ生きていたいかい?」

「そりやまあ」

「じゃあ、BLEACHの世界へ転生してもらおうかな」

「転生か・記憶は消されるのか?」

「いや、消さんよ」

「そうか、BLEACHってことは斬魄刀や鬼道がつかえるのか?」

「もちろん、虚化もできるようなようにしましょう」

「それはありがたい!!」

「では、行け!!」その言葉と共にアルムの下に穴があきそのまま落ちていく

「じじっ、テメエ覚えとけよ!!」

「…ん、ここは…」

「あ、目が覚めた？」

「ああ、つて猫!？」

「あい!! オイラはハッピー、猫です」

「そ、そうか。ハッピーってFAIRYTAILのか!？」

「あい!! オイラを知ってるってことはマグノリアに住んでるの?！」

「いや、たまたま耳にしたことがあるんだ…(FAIRYTAILの世界になぜ来たんだ)」

ふと考えると…

「(すまんのお、間違えた)」

「なっ!？」

「どうしたの?！」

「いや、なんでもない…(ふざっけんな、死神の力はどうなるんだよっ)」

「ホントに大丈夫？」

「ああ、そう言えばハツピーは一人？でここにいたのか？」

「ううん、ナツとルーシイと依頼中にたまたま見つけてルーシイが医者呼んでくるから見ててって」

「ナツとルーシイはどういう人物なんだ？」

「ナツはナツ・ドラグニルっていつて火竜（サラマンダー）って呼ばれてるんだ。ルーシイはすぐ変な汗を出す人だよ」

「ルーシイは人間じゃないのかな？…（ルーシイ酷い言われようだな）」

「ううん、二人とも人間だよ」

「そ、そうか…」

「あい!!」

「そう言えばナツの姿がないが…」

「あつ!!ほんとだア!!!」

「気づいてなかったんだ」

「どうしよー」

「探しにいったらどうだろ？」

「でもルーシイに怒られちゃう」

「ルーシイには俺から言っておこう」

「本当に!?じゃあ、オイラ、ナツ探してくる!!」

「おう!!」

そうしてハッピーは走っていった

「FAIRYTAILの世界に来ることになるとは…」

「(すまんのお、その分死神の力は全て魔法に変えといたぞ)」

「とうとうと」

「(換装、というよりは騎士(ザ・ナイト)なように発動すれば死神化するようにしてある。鬼道は死神化しなくても使えるぞ)」

「そうか、それはどうも」

こうしてアルムの新たな?人生がはじまった???

「さあて、なににしてルーシイを待つかな」

伸びをしながら考え始めるアルム

すると・・・

「あれ？この辺に居たと思うんだけどな・・・ ナツ〜!!ハッピー!!」

近くからさつきまで居たハッピーと元からどこかへ行っていたナツを探す声でした

「（ルーシイだな）・・・ 動いて会いにいった方がいいかな」

よつと言って立ち上がると声のする方へ歩き始めた

「・・・ 誰か探しているのかい？」

「うわっ・・・ ってあんた!? さつき倒れてた人じゃない!? ああ〜もうー二人に頼ったあたしが馬鹿だった・・・」

「あ、あのくハッピーならさっきまで俺を見ててくれてたよ。ただ、ナツという子が見当たらなかつたから探しにかせたんだ。責めないであげてくれ」

優しい口調でルーシイに事情を話すアルム

「あ、そうだったの。まあその事は置いて、自己紹介がまだだったね。あたしはルーシイ、星霊魔導士よ。」

「よろしくな、ルーシイ！俺はアルムだ」

といつて手を差し出すアルム

「よろしくね！アルム!!」

出された手に優しく手を合わせて握手をする

「なんか、照れる…」

握手をして赤くなるルーシイ

「ははっ、顔真っ赤だねっ」

「えっ?!い、いやこれは、その…」

「でえきてえる〜」

タイミングを計ったかのように戻ってきたハッピー

ルーシイに捕まり耳を限界以上に引つ張られていた

「ごめんなさい…」

「よろしい」

女王みたいな態度になるルーシイ

「で、ナツは見つかったの？」

ルーシイがイライラしながら聞いた

「ううん、森中探したけど見つかなかった……」

「はあ…… もうどこにいったんだか……」

「森の外はどうなんだ？」

「あ、それがね…… 出られないの」

「…… は？」

「あい」

「遭難したのか……？」

「ううん、森から『出られない』の」

「…… は？」

ルーシイの言葉を理解できないアルム

「あい」

「でもルーシイ、さつき医者呼んでくるって言って……」

「出られないの忘れてたのよ」

「(真面目な顔で言うなよ…) : : : じゃあ、ナツは必ずこの森にいるのでは : : : ?」

「そのはずなんだけど : : : ハッピー、本当にいなかった?」

「あい、この森そんなに広くないからいろんなところ探しまわったよ!」

「そうよね : : .」

「ならみんなで探せばいいのでは?」

「倒れてた人を連れ回せないわよ!?!」

「大丈夫だ、問題ない」

「 : : : . 何この微妙な雰囲気」

「ま、まあとりあえず探しにいきましょう!!」

「しんどくなったらすぐに言いなさいよ」

「ああ、わかった」